

# 文化資料室ニュース

第15号 2011年11月・札幌市文化資料室発行

## 「平成23年度文化資料室企画講演会」について主催者からの報告

—高野・富永両氏の講演とパネルディスカッションから— (文化資料室資料担当係長 竹内 啓)

『平成23年度文化資料室企画講演会』は「公文書館開設準備期の留意点」を企画テーマとして10月21日(金)に当施設内にて開催された。

本年度は、先進的公文書館で開設準備や館の運営に直接携われた元藤沢市文書館長の高野修氏と現沖縄県公文書館主幹の富永一也氏のお二人を基調講演の講師としてお招きした。

本市では、この6月に策定した「公文書館整備計画」により開館スケジュールが具体化したため、開設準備期の留意点について先輩諸氏からご教示を受けるには絶好の時機と考えたからである。

今年は前半の基調講演2本に続けて、後半にはパネルディスカッションも行うことにした。議論をより深めるためであり、本市公文書館基本構想検討委員会の正副委員長である大濱徹也氏と鈴江英一氏にそれぞれコーディネーターとパネリストをお願いした。

高野修氏は『公文書語る ～今、公文書が危ない～』と題し、公文書館法がまだこの世にない時代、いかにして藤沢市に文書館を開設し、公文書管理の制度設計を成し遂げていったか、失敗例も隠すところなく熱い口調で存分に語ってくださった。高野氏の強烈な突破力はそのパーソナリティに負うところが大きいと思われるが、後進の参考となる体験談も数多く紹介され、本市も貴重な教訓を得ることができたと思う。氏の公文書管理に対する情熱の深さは当日の参加者が均しく感じ取ったものと確信している。

富永一也氏の基調講演『創業の秋(とき)に臨んで：札幌市公文書館の未来』は、一言でいうなら、氏の提案する「体系的アーカイブズマネジメント論」の具体的な紹介であったといえよう。

沈着冷静に語られた氏の講演は、厳密な用語規

定から独創的なアレゴリーの駆使に至るまで、まるで磨き抜かれたパフォーマンスを見ているようであった。これは、氏ご自身が戦略などを自在に操る名参謀的素養の持ち主だからかもしれない。まさに目からウロコの講演内容であった。

パネルディスカッションは、大濱氏の練達の司会進行の下、質問への回答を織り込みつつ、論点が次第に収斂していく結果となった。冒頭、鈴江氏より「北海道立文書館の設置経過から」という報告があり、「時代の刻印を負う自治体アーカイブズ」というテーマが示された。議論は、札幌市公文書館も含めた4館のみならず、山口県文書館や京都府立総合資料館にまで及び、それぞれのアーカイブズの成り立ちや存在意義に話は発展した。そのほか、1) 公布直後の鳥取県公文書管理条例の紹介や 2) 行政の問題点を指摘する「民主主義



の器」  
として  
のアー  
カイブ  
ズ、3)  
アーカ

イズにおける展示論(歴史館や博物館との違い)、4) 閉じたアーカイブズの危険性、5) アーカイブズの陰の部分(危険文書の所蔵)の自覚、6) アーカイブズにおける専門職員論(資質としての禁欲性と寡黙性)など議論は多岐にわたり、中身の濃い考察が定刻となるまで続けられた。

最後に鈴江氏から「札幌市は意欲的に開設準備を進めているが、開館してからもその態勢を持続してほしい」との要望が出されて本年度の文化資料室企画講演会は閉会した。(なお、本講演録は来年刊行の「研究紀要第4号」に掲載予定である)

# 屯田兵屋の建設の見積書



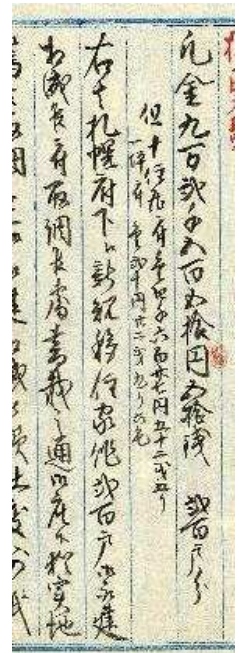
文化資料室の『大村耕太郎資料』に、工業課が作成した「札幌府式百戸之官宅新造ニ付当時滞在之諸職人過不足并出来日数取調書」と、明治7年3月15日付の工業課と会計課から次官・幹事・七等出仕にあてた札幌府下に新規移住家作200戸取建の費用見積を伺う文書がある。費用見積の文書は同日付の室蘭に100戸建設に関するものもある。15日付の書類は、17日には決裁を受けているので、東京出張所の工業課と会計課から東京出張所の幹部と次官へ伺ったものである。札幌府下官宅200戸と新規移住家作200戸は同じものをさし、時期やほかの屯田兵関係の文書などから琴似屯田兵村の兵屋建設見積である。

「札幌府式百戸之官宅新造ニ付当時滞在之諸職人過不足并出来日数取調書」は、当時札幌に滞在している大工180人、鳶人足40人、平人足165人、屋根職12人、左官9人、建具職2人、畳刺2人に対し、鳶と平人足以外の職人について、200戸を建築する際の労働量を見積もって人数の過不足を上申ししている。当時滞在していた大工180人で200戸建設におよそ178日かかると見積もり、その178日間に必要な職人の人数と当時滞在していた人数との過不足を見積もったものである。例えば200戸分の畳は6,560枚となり、それを178日間で作成するには、1人1日8枚つくるとして4人必要となり、2人不足しているという計算をしている。この畳数から1戸分の広さを推察すると、1戸分32.8畳となり、畳の部屋だけで1戸分16.4坪となる。室蘭の兵屋は、4畳の板の間や1畳程度の土間や押入も含めて1戸18坪であるから、この案では、板の間や土間などを含めるとそれより広いことになる。復元された琴似屯田兵村の17.5坪の兵屋よりも広いものだろう。しかしこの案は、明治7年第3月14日安田幹事に提出したが採用されなかった。

札幌に新規移住家作200戸を建設するための見積金額は、200戸分92,550円、10軒分につき4,627円52銭5厘、1坪につき20円22銭9厘6毛となっている。室蘭への100戸建設見積もりは、同じく10軒分で43,961円50銭、1坪19円26銭2毛余となっている。室蘭の文書は、『東京往復』（北海道立文書館1029-39）の室蘭での建設に関する東京と函館の往復文書中にも綴られている。この室蘭での建設は、当所札幌工業局から出張して担当する方針だったが、札幌での造営夥多、札幌から遠隔であることなどから函館での入札を進言している。札幌分も室蘭分も実地調査を十分した上で建築する事を絵図面と仕様積書を副えて伺っている。10軒分ごとの費用を見積もるのは、『東京往復』の往復文書中の「室蘭港官宅拾住居新規建仕様書」にある絵図面によると、桁行18間梁間4間4戸建て2棟と桁行9間梁間4間2戸建て1棟、その他各戸に厩付物置、1棟ごとに井戸屋1棟を1セットとして例示しているので、この組み合わせで100軒を建築するためである。この仕様積書にも詳しく資材や労働算定を行っている。これは札幌にも同様の見積があるはずだが、残念ながら未発見である。室蘭の経緯をみると、入札の結果100戸すべてを一業者が請け負う事になったが、大きな業者ではなかったらしく、100戸すべてを請け負わせるのは心許ないと、2番札の業者とともに50戸ずつ請け負わせる事にした。しかし室蘭ではその後兵屋の建設も明治8年に屯田兵の入植もなかった。

明治8年札幌郡琴似村に屯田兵が入植する。この入植は、土地の選定や家屋の質などで議論があって、やっと決まった。まず土地については、札幌本庁の月寒案、東京出張所の琴似案などがあつたらしい。結局、函館支庁の農業課所属で七重村の官園に勤務する村橋久成大主典が、地所調査のためにわざわざ札幌まで出張し、恐らく東京の指示によるのだろうが、琴似に適地を選び造成した。建物の質についても、風呂やストーブを設置し、煉瓦を使用する案が出されたようだが、費用の問題で風呂もストーブも煉瓦もなしになつたらしい。また、長屋とする案であったが、ケプロンの助言で1戸建ちに決まつたらしい。

紹介の文書3通は、施策案としては実施されずに反古となつたものである。しかし屯田兵村の選定や屯田兵屋建設の事情の一端を示すものである。(総務局行政部文化資料室 榎本 洋介)

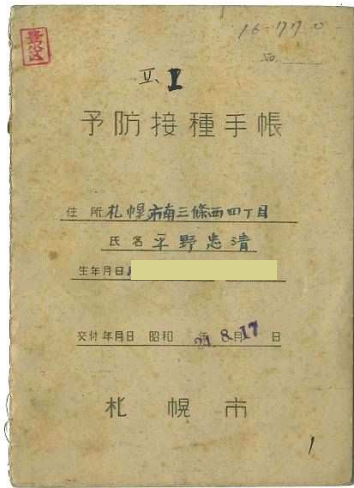


# 札幌で最初の予防接種手帳



文化資料室では収蔵資料の充実に努めていますが、この一環として市民のみなさんから、公文書を補完する貴重な地域資料の寄贈を受けています。今回はこうした寄贈資料から、昭和20年代の市民生活の様子を知ることのできる記録をご紹介します。

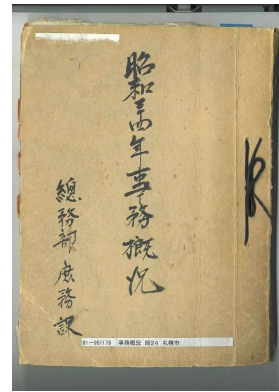
今年7月、市内在住の方から公立小・中・高等学校時代の記録を中心に30点以上の資料をご寄贈いただきました。下の写真はそのひとつで、昭和27年発行の「予防接種手帳」です。寄贈に際しては寄贈者から個々の記録のお話をうかがって情報を集め、目録に反映させますが、この手帳については「札幌市で最初に交付した予防接種手帳」とご説明を受けました。そこで調べてみたところ、次のようなことがわかりました。



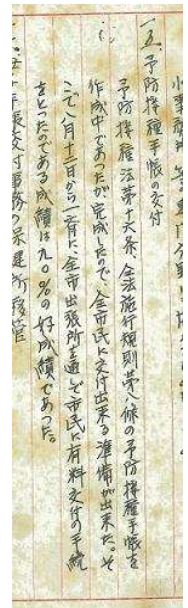
終戦直後の昭和20年代はじめ、札幌市内では伝染病が大発生し、当時重大な問題となりました。たとえば、病気を媒介するシラミ駆除のためのDDT散布は、空から飛行機で行ったり、市内全児童を対象に一斉散布するなど大規模であり、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。予防接種もこうした対策のひとつでした。市内での接種は21年からはじめられていましたが、22年以降、コレラやチフス、痘瘡、結核予防の「ツベルクリン反応」とBCG接種など、さまざまな伝染病に対して、若年層を中心に広く行われるようになります。さらに23年に「予防接種法」が制定され、指定された伝染病の予防接種が義務化されました。

このときの市の対応を知ることのできる公文書が次の写真です。札幌市が作成した「昭和二十四年事務概況」で、各部課の一年間の活動の概要報告をまとめた記録です。その厚生部衛生課の報告のなかに

「予防接種手帳の交付」があります。ここには、法制定を受けて作成中だった手帳が完成したので、8月12日から全市出張所を通して市民に一斉に有料交付を開始し、「九〇%の好成績」を達成したと書かれています。



記述の部分



そこで、もう一度今回の寄贈資料の表紙を見ると、交付年月日に昭和24年8月17日と書かれています。これは交付開始のわずか5日後で、まさに「最初の予防接種手帳」だということがわかりました。発行は札幌市で、左上には管轄の「豊水区」の印がおされています。手帳をひらくと、健康標語や予防接種の種類が記され、所有者が通学していた小・中学校で、実際に24~28年に接種をうけた記録が残されていました。また最終ページには、「注意」として「予防接種の証明はこの手帳一冊で全部終るから予防注射の通知を受けたときはこの手帳を持参すればよい」や、「この手帳は自分の健康状態を記入してあるから健康証明書となる」などの記載があり、手帳交付が市民生活にどう影響したのかがわかります。こうした対策を経て、伝染病流行は20年代後半には沈静化していきました。

今回は終戦後の札幌市の保健衛生行政の概要を、市民に交付した「予防接種手帳」と、その政策報告という二つの所蔵公文書から描き出しました。交付された公文書は役所内には残らないため、大変貴重であり、また市民の皆さんの記憶に直接はたらきかける力をもった記録ともいえるでしょう。

相談室では、今後もさまざまな公文書や地域資料を中心に、札幌の行政・生活・歴史を知る場を提供していきたいと思っておりますので、お気軽にご相談、ご来館ください。

※寄贈者のご希望により、氏名を伏せさせていただきました。

(郷土史相談員 秋山淳子)

# 行事予定

小・中学生向け講座

## 札幌の歴史探検

札幌の歴史に詳しい先生の話や、文化資料室にある写真・地図などを使って「札幌の歴史新聞」をつくろう！

■テーマ■

①「冬の生活の楽しみ、氷上カーニバルとは？」

2月4日(土) (1月26日(木)しめきり)

■時間■ 全て10時～12時30分

■会場■ 札幌市文化資料室2階 郷土史相談室

■対象■ 小学4年生～中学生

■定員■ 12名(応募者多数の場合は抽選。)

■講師■ 榎本 洋介(札幌市文化資料室)



※お申込方法(札幌の歴史探検・資料でみる札幌共通)

電話、ハガキまたはEメールで下記の宛先までお申し込みください。

ハガキ・Eメールの場合は講座名(希望の回)、住所、郵便番号、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号、学校名、学年をご記入ください。

高校・大学生向け講座

## 資料で見る札幌

札幌に関する文書・地図・写真など、テーマに基づいた史料を用いて、札幌の歴史を研究します。

■テーマ■「札幌市民の娯楽と劇場・映画館」史料を元に、札幌の繁華街や歓楽街などの変遷を探ります。

■日 時■平成24年1月6日(金)または10日(火)のどちらかを選択できます。14時～16時

■場 所■文化資料室2F 編集室

■対 象■高校生または大学生(15歳以上)

古文書講座初級コース

## 古文書を読もう～古文書の基礎知識

■日時■ 平成24年2月21日(火)、2月28日(火)全2回  
18時15分～20時15分

■申込締切■平成24年2月9日(木) (必着)

■会場■ 札幌市文化資料室2階 会議室

■対象■ 市内に居住か通勤・通学する、古文書がある程度読めて、3回連続参加が可能な方。

■定員■ 30名(応募者多数の場合は抽選。)

■講師■ 榎本 洋介(札幌市文化資料室)

※お申込方法(古文書講座)

往復ハガキに、講座名、住所、郵便番号、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号、返信先をご記入のうえ、下記住所までお送りください。一通につきお一人様一講座のお申し込みとなります。

## 文化資料室 利用のご案内

■開館時間■ 8時45分～17時15分 ■入館料■ 無料

■休館日■ 土・日・祝日・年末年始(12月29日～1月3日)

■交通アクセス■

東豊線「豊水すすきの」駅下車6・7番出口から徒歩3分、  
または南北線「中島公園」駅下車1・2番出口から徒歩5分

♪郷土史相談室・札幌の歴史展示室がご利用になれます

♪ご来館の際は公共交通機関でお越しください



さっぽろ市

05-B00-11-610

23-3-280

文化資料室ニュース

第15号・2011年11月

発行 札幌市文化資料室 〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

Tel・文化資料室事務局 011-521-0205, 郷土史相談室 011-521-0207 Fax 011-521-0210

E-mail・shiryoshitsu@city.sapporo.jp URL・http://www.city.sapporo.jp/bunkashiryo/